

世界商品が歴史を作った — 川北 稔『砂糖の世界史』 —

以前『香料の歴史』を紹介したが、思わぬ商品が世界の歴史を変えて行く。特に衣食住の「衣食」は嗜好性が強く、何でこんなにもてはやされたのかと思う。近世日本の莫大な白銀の多くが和蘭・清との絹織物貿易に消えた。(菊地実)

砂糖の価値下落

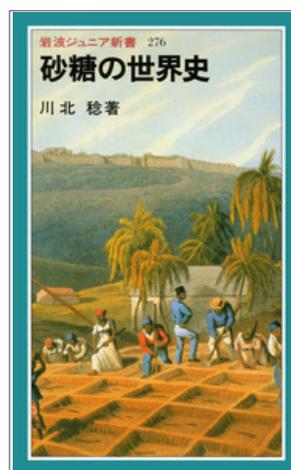
砂糖はダイエット大敵・虫歯原因と、意味なく嫌われている。一昔前まで砂糖は盆暮に送る定番商品。分厚い高島屋のカタログからも消えた。子供の頃、砂糖が入った贈答品は輝いて見えた。その私でさえ、今や紅茶・珈琲に砂糖は入れない。とは言ってもチョコレート・アイスクリーム・ケーキ大好きなので、結構知らずに取っているかも？

最近衛星放送で『溺れ谷』(松本清張原作/近藤正臣主演・三時間ドラマ)を見て、砂糖汚職って砂糖が「美味しい産業」だったことを思い出した。芸達者な配役の力作ドラマ。

香料・茶・珈琲・カカオ(チョコレート)、砂糖、烟草は世界商品。「この世界商品<スティブル>を独り占めでできれば大きな利益をあげられる」(5頁)

<図表>本書の章立て

- プロローグ 砂糖のふしぎ
- 第1章 ヨーロッパの砂糖はどこからきたのか
- 第2章 カリブ海と砂糖
- 第3章 砂糖と茶の遭遇
- 第4章 コーヒー・ハウスが育んだ近代文化
- 第5章 茶・コーヒー・チョコレート
- 第6章 「砂糖のあるところに、奴隷あり」
- 第7章 イギリス風の朝食と「お茶の休み」
—— 労働者のお茶 ——
- 第8章 奴隷と砂糖をめぐる政治
- 第9章 砂糖きびの旅の終わり
—— ビートの挑戦 ——
- エピローグ モノをつうじてみる世界史
—— 世界史をどう学ぶべきか ——



<岩波ジュニア新書>

薬から食品に

茶をはじめとした世界商品はこれまでも名著がある*1。私自身映像作品リサーチャーとして珈琲の反時計回りの歴史を調べたことがある。本書はウォーラーステイン『近代世界システム』翻訳者の手によるもので、非常に意欲的な記述が多く「世界史を学ぶ人は必読」。96年初版で2023年まで43刷のロングセラーとなっている。

「砂糖の消費が生活の基準」「砂糖の甘味は全て好き」(3-5頁)は<紙消費量が文明のバロメーター>あるいは<「石油」「電気」消費量が文明進歩>といった様々なキャッチフレーズを思い出させる。そにしても香料が黄金より高かったというのはやはり驚く他ない。

もう一つ、香料・茶・珈琲・砂糖さらに烟草が全て高価な「薬品」として出発したことは特筆される。「イスラムの医学では、砂糖は最もよく使われる薬の一つ」(9頁)で

ヨーロッパでもこれが踏襲された。また「砂糖の神秘性の最大の理由は純白」(9頁)にある。タージ・マハルやギリシャ・ルネッサンス彫刻の荘厳さ美しさは、白大理石に寄るところが大きい。

砂糖の苦い歴史

砂糖原材料「砂糖きび(甘藷)」はインドまたはインドネシア原産。サトウキビ栽培は「適度の雨量と温度が必要・・・土壌の肥料分が消耗して土地が荒れる・・・ためどんどん移動し、加工は重労働で・・・サトウキビと奴隷労働が何百年も続いている」(15-16頁要約)。古代エジプト・イスラムを経て、近代砂糖生産は英・仏のカリブ海植民地のプランテーションとアフリカ系黒人奴隷使用という黒く苦い歴史が続いた。無論古代から金採掘など鉱山労働や軍船漕手といった過酷奴隷労働はあったが、砂糖プランテーションほどシステムティックな使役は他には見られない。

砂糖が大きく伸張した理由は、英国におけるむ紅茶との結びつきにある。王室・貴族から始まった紅茶砂糖は、大陸諸国ではコーヒーやカカオと結びついた。

変貌するプランテーション

宝探しと鉱山開発の場になったカリブ諸島は「十七世紀に砂糖キビ栽培が広まると、状況が一変」(39頁)。広大なプランテーションが開発され、「モノカルチャー」が形成される<図表2>。

アメリカ先住民(インディアン)は銃と細菌(インフルエンザ)で大量絶滅し人口減少。西アフリカから黒人奴隷の大量導入が行われた。黒人王国の奴隷狩・押込航海の酷さで約半数が亡くなるという凄まじい歴史がここにある。近世近代まで新大陸には黒人はいなかった。砂糖・綿花・烟草といったプランテーションの中でも砂糖がもつとも利益率が高く、労働も厳しい。少数のプランテーションの持ち主は故郷に錦を飾り、ごく少数の白人監督と大

<図表2> 近代のモノカルチャー生産地

砂糖	カリブ海諸島
綿花	アメリカ合衆国南部
コーヒー豆	南米諸国
茶	セイロン島(スリランカ)
ゴム	インドネシア一部

量の黒人奴隷が残った。砂糖プランテーションの厳しさはサトウキビから「短時間で原液ジュースを作り、砂糖生成する」(44頁)プロセスにもある。「砂糖プランテーションは単なる農場だけでなく、簡単な工場を伴っていた・・・畜力・風力から蒸気も早くから導入」された(44-50頁)。

カリブ海における砂糖プランテーションも、英領バルバドスから十七世紀後半ジャマイカ、十八世紀末はキューバと生産地は移る。今日の英ブリストル・リバプール、仏ナントの壮麗な建築は砂糖プランテーション利益の上に建っている。

①黒人奴隷②砂糖・だばこ・綿花③工業製品の三角貿易が近代西欧発展のもう一つの秘密でもある。

独自の文化

「黒人奴隷たちは音楽をはじめとするアフロ・カリビアン文化、ブードゥー教などの宗教、キューバ・スタイルの音楽を作り、少数の白人たちは現地世代になるとクレオール(クレオール)というコロニアル・スタイルを持つようになった。

砂糖は茶・コーヒー・烟草とともに生活革命を起こした世界商品である。十九世紀になると十八世紀末期プロシヤがビート(砂糖大根)から砂糖を取り出す技術を開発。砂糖の歴史は熱帯から離れ、さらに人工甘味料に取って代わられていく。麻・絹・綿・毛織物と化学繊維の関係と似ている。

本書は話題豊富で、「大人たちにもおすすめ」。

*1:角山栄『茶の世界史』など名著が多い

■筆者/ 川北 稔=1940年大阪市生まれ。1963年京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退、文学博士。大阪大学文学部教授などを経て、佛教大学教授、大阪大学名誉教授。『工業化の歴史的前提—帝国とジェントルマン』『民衆の大英帝国—近世イギリス社会とアメリカ移民』、訳書I・ウォーラスティン『近代世界システム』、S・W・ミンツ『甘さと権力—砂糖が語る近代史』など著訳書多数。

■書誌/ 岩波ジュニア文庫、96年7月初版、2023年3月43刷